九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

セリーヌのパンフレ復刊計画をめぐって

木下，樹親
九州大学：非常勤教師

https://doi.org/10.15017/2203065

出版情報：Stella. 37, pp.249-254, 2018-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

セリーヌのパンフレ復刊計画をめぐって

木　下　樹　親

セリーヌの反ユダヤ主義・親ナチス的パンフレ『皆殺しのための戯言』『死体の学校』『苦境』（それぞれ初版は 1937，38，41 年）は作家の遺志を継ぐリュセット・デトゥーシュ未亡人の意向で，今日に至るまでフランスでは復刊されていない。しかしながら 2017 年末，これらの作品の批評校訂版が 2018 年 5 月にガリマール書店から出版されるというニュースが報じられ，大きな騒動に発展した[1)]。20 世紀フランスの大作家か悪辣な反ユダヤ主義者か，良いセリーヌか悪いセリーヌか――こうした議論が再燃したのである。この騒動の推移を概観したうえで，悪循環を断ち切ること――本稿の目的はこの一言に尽きる。

復刊計画の報道は，極右系の新刊雑誌「ランコレクト」のサイトによる 2017 年 12 月 1 日付の記事を嚆矢とし，その裏付けを取る形で「レクスプレス」誌による同月 5 日付の記事が続いた[2)]。そしてこれ以降，頻繁に発言することになるのが，この大手週刊誌の記事の最後で言及された政治哲学者ピエール＝アンドレ・タギエフと文学・歴史学者アニック・デュラフールである。両者は同年 2 月，『セリーヌ，人種，ユダヤ人。文学の伝説と歴史の真実』という大著をものし，占領下のセリーヌの人種主義的言動をきわめて批判的に検討していたため，意見を求められたのだ[3)]。さらにタギエフが理事を務める〈フランスユダヤ協会代表者会議（Crif）〉や〈人種主義と反ユダヤ主義に対抗する国際同盟（LICRA）〉は復刊に反対する運動を展開した[4)]。またこれらの団体は政治家をも動かした。〈人種主義，反ユダヤ主義，反 LGBT 嫌悪への反対運動各省間代表団（DILCRAH）〉代表のフレデリック・ポティエがガリマール書店社主アントワーヌ・ガリマールに書簡を送り，「その批評校訂版の推敲状況と，科学性と学際性を保証するために講じられる措置について明確にするように」要請したのである[5)]。政府のこうした介入はむろん異例で，検閲でないとはいえ，出版差し止めに向けて圧力をかけることに他ならなかった。それ以上にダメ押しと

なったのが，歴史学者で弁護士のセルジュ・クラルスフェルドの登場だ。彼は〈強制移送されたユダヤ人の息子と娘たち〉という団体の会長で，『皆殺しのための戯言』を「反ユダヤ主義の開祖たる文書」とみなし，著者セリーヌを「原子爆弾」と評する人物である[6)]。この老いた闘士は Crif の会長フランシス・カリファに出版禁止の支持を確約させ，他の弁護士とともに可能な法的措置を模索した。ずっと強気の姿勢を崩さなかったガリマールであったが，クラルスフェルドに追い込まれることによって，ついに 2018 年 1 月 11 日，復刊の中止を発表するに至ったのである（ただし計画を諦めていないことも明言）。

先述のとおり，セリーヌ作品の版権所有者リュセット未亡人はパンフレ復刊に決して首肯しなかった。また作家の遺言執行人たる弁護士フランソワ・ジボーも復刊には否定的で，巷に流布する海賊版の取り締まりに頭を悩ませていた[7)]。では何故彼らは復刊を許可したのか。翻意の根底には時代の大きな変化という認識があったようだ。ジボーはフランス解放時に死刑判決を受けた（後に恩赦）リュシアン・ルバテの反ユダヤ主義パンフレ『残骸』が 2015 年に復刊されたことに仰天したと説明する[8)]。そして Crif のような団体がそれに反応しなかったことに着目し，『皆殺しのための戯言』を出版できる時が到来したのではないかと考えたと言う。その結果リュセットも彼の説得に応じたのである。さらに重要な契機として，すでに 2012 年にカナダでパンフレの批評校訂版が刊行されていた事実を挙げなければならない（以下，カナダ版と略）[9)]。これは，当国での著作権保護期間が著作者の死後 50 年（フランスでは 70 年）であることから実現した椿事であった。校訂者はパンフレの生成学的要素も含む研究で博士号を取得したレジス・テッタマンズィ[10)]。ジボーはこのカナダ版を基にして，必要ならば歴史家たちも交え，テッタマンズィによる批評分析に加筆修正を施した版を準備しようと構想したのである。付言すれば，カナダ版の出版事情は，パンフレがフランスでも 2032 年にパブリック・ドメインになることを，すなわち海賊版が大手を振ってまかり通るようになることをジボーらに改めて突きつけたのではないか。2018 年 12 月現在，リュセット未亡人は 106 歳で，24 時間の介護が必要な状態だという。またジボーも 86 歳の高齢である。セリーヌ研究学会会長も務めるこの弁護士が存命中に学術的出版によって非合法パンフレの無効化を確立させておこうと考えたであろうことは想像に難くない。

本国での批評校訂版刊行にはこのように大きな意義があるのだが，それでも

クラルスフェルドとタギエフは復刊に異を唱える。彼らの主張をまとめたうえで，若干の私見を述べたい。

まずクラルスフェルドは小説『夜の果てへの旅』の作家セリーヌは認めており，パンフレについても大学等で研究の俎上に載せることは否定していない。じじつ，彼はテッタマンズィの博士号申請時の審査員の一人であった。しかし出版となると，版の如何を問わず，禁止以外の選択肢はないという立場を堅持し，復刊を「妨げるため私にできるあらゆることをするつもりだ」とさえ述べている。彼にとって，とりわけ『皆殺しのための戯言』はユダヤ人たちの殺害を呼びかけるテクストであるからだ[11)]。父をアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所で亡くし，自身も辛酸を舐めた経験を有する者からすると，今回の復刊計画はフランス最大の出版社が反ユダヤ主義にお墨付きを与えるような出来事で，到底耐えられないのであろう。それは心情的に痛いほど理解できる。同じ立場であれば，そのような書物を冷静には読めまい。それでも，だ。この執拗なナチ・ハンターのパンフレ観は反ユダヤ主義という「木を見て森を見ず」の態度なのである。セリーヌのパンフレは反ユダヤ的言辞のみで構成されているわけではないし，また作風の変遷を把握するためにもパンフレ期を無視・否定することはできない。研究に供する情報を備えた批評校訂版に対しては，倫理的判断を留保すべきではないか。この騒動について現代アメリカのユダヤ系作家ポール・オースターがフランス語で述べた発言は傾聴に値する――「だが私は彼についての全てを理解すべきだと思う。そして〔これらの著作を〕削除することは良い考えではない，たとえそれが衝撃的で嫌悪すべきであっても」[12)]。

一方，タギエフは批評校訂版の出版自体は否定していないのだが，カナダ版を不十分だとみなす。つまり，一人の文学研究者によるのでなく，歴史の専門家なども交えた学際的チームを組んで，より綿密に作成すべきだと言うのである。一見すると，タギエフの方針はジボーのそれと大差はない。しかし彼が理想とするのは，反ユダヤ主義「プロパガンダの嘘を解体し，誤った主張や不正確さや大まかな部分を指摘・修正し，詭弁あるいは同一視されている箇所を明らかにして分析し，中傷的な非難であることを読者が識別する一助となる」ような註釈を完備した版なのだ[13)]。ユダヤ人が被った過去を重視するタギエフは，セリーヌのパンフレが現代でも歴史修正主義者，特に先だって他界したロベール・フォーリッソンを筆頭とする大量虐殺否定論者やネオナチたちの思想的

バックボーンだと考えている。それゆえ，批評校訂版にはそうした影響を及ぼす余地がないように，読者を反・反ユダヤ主義へと誘導する装置を策定したいのである。しかしながら，そもそも反ユダヤ主義言説が信憑性のないヘイトスピーチであることは今や贅言を要しない。それは偽書『シオン賢者の議定書』の研究に携わったタギエフならば，十分承知しているのではないか。くわえて，セリーヌの反ユダヤ主義は常軌を逸脱し，時には錯乱的な表現によるものが多く，読者に主張を納得させるどころか，そのいかがわしさを一層露呈させていなかったか。換言すれば，セリーヌのパンフレを読んで反ユダヤ主義を訴えることは己の無知蒙昧を公表することに他ならないのである。したがって，タギエフのような強引さを発動させるには及ばないであろう。私見では，パンフレを歴史の文脈の中で読めるように情報を補い，なおかつセリーヌの文学創造におけるその役割を示唆すること，この２点に留意したテッタマンズィによる版こそ，もちろん修正等は必要であろうが，まさに批評校訂版なのである[14)]。

今回の騒動にかんしては，セリーヌのプレイアッド版校訂者で40年余りに亘って斯界をリードしてきたアンリ・ゴダールの言葉に文学研究者の立場からの総括を見出すことができると思われるので，それを引用して本稿を締めくくりたい――

> パンフレの復刊によるリスクはそれが読者の内に人種主義をかきたてたり呼び覚ましたりする誘惑を及ぼすということであろう。しかし今日再読すると，そうした力はかかる考えにすでに捕らわれた読者にしか及ぼしえないであろうことがすぐに分かる。そうでない人々にとって，最初に込み上がる憤りを越えると，残るのはもはや退屈でしかない。実に多くのページがユダヤ人の欠点，欠陥，醜悪さ，彼らの術策，策略，陰謀などをくどくどと繰り返すために汚され，最後まで行くのは困難である。〔…〕
>
> この読者がそれでも読み続けるのは，セリーヌの小説において好んだページをあちこちに見い出すことを期待するからである。そしてパンフレが反ユダヤ的饒舌のみをもたらすのであればことはもっと単純であろう。[15)]

註

1）我が国でも AFP 通信が報道した―― voir URL : http://www.afpbb. com/articles/-/3166232.

2）Voir l'article suivant — URL : https://www.lexpress.fr/culture/les-pamphlets-

antisemites-de-celine-vont-etre-reedites-en-2018_1966370.html. 実は同年7月19日にフィリップ・ソレルスがネット雑誌「ラ・コーズ・リテレール」のインタビューでこの計画をスクープとして暴露している（voir URL : http://www.lacauselitteraire.fr/la-cause-de-philippe-sollers-par-philippe-chauche）。

3）Annick DURAFFOUR, Pierre-André TAGUIEFF, *Céline, la race, le Juif. Légende littéraire et vérité historique*, Paris : Fayard, 2017. 本書には事実関係の誤認や見落としがあり，セリーヌ研究プロパー側からの反論書がすでに刊行されている―― David ALLIOT, Éric MAZET, *Avez-vous lu Céline ?*, Paris : Éd. Pierre-Guillaume de Roux, 2018. とはいえ，この1,000ページを超える労作が重要なレファレンスになりうることは間違いない。

4）とりわけ LICRA はインターネットの change.org を用いて復刊に反対する署名の拡散に努めた。署名者数は20日も要さずに2万人に達し，大きな成果を挙げたことになる。

5）Voir l'article suivant — URL : https://www.lexpress.fr/culture/reedition-des-pamphlets-antisemites-de-celine-le-gouvernement-veut-des-garanties_1968866.html. さらにポティエは直接ガリマールと面会し，要請を繰り返した。またガリマールの元にはイスラエル政府の関係者からも出版中止を請う書状が送付されている。

6）Voir *L'Obs*, n° 2774, 4 janvier 2018, pp. 26 et 27.

7）近年はインターネットの普及で，わざわざ極右系などの特殊な書店に足を運ばなくても，アマゾンで容易に非合法パンフレを購入できるという現状がある。

8）Voir l'article suivant — URL : https://bibliobs.nouvelobs.com/actualites/20171221.OBS9643/xfrancois-gibault-nous-publierons-les-pamphlets-de-celine-quand-nous-serons-prets.html. ただしこの記事は有料。またルバテの『残骸』については次を参照されたい―― Lucien REBATET, *Les Décombres*, in *Le Dossier Rebatet*, édition établie et annotée par Bénédicte VERGEZ-CHAIGNON, Paris : Robert Laffont, coll. « Bouquins », 2015.

9）Louis-Ferdinand CÉLINE, *Écrits polémiques*, édition critique établie, présentée et annotée par Régis TETTAMANZI, Québec : Éd. Huit, 2012.

10）この博士論文に基づく著作が次のとおり刊行されている―― Régis TETTAMANZI, *Ésthétique de l'outrance. Idéologie et stylistique dans les pamphlets de L.-F. Céline*, Tusson : Éd. Du Lérot, 1999.

11）Voir l'article suivant — URL : https://bibliobs.nouvelobs.com/actualites/20171220.OBS9534/serge-klarsfeld-je-reclame-l-interdiction-de-la-reedition-des-pamphlet-antisemites-de-celine.html. この記事も有料。

12）Voir l'article suivant : https://www.lepoint.fr/livres/paul-auster-ignorer-les-ecrits-antisemites-de-celine-n-est-pas-une-bonne-idee-12-01-2018-2186025_37.php.

13）Voir « *Faut-il rééditer les pamphlets de Céline ?* », propos recueillis par Stéphane BOU, *Marianne*, n° 1086, 5-11 janvier 2018, p. 75.

14) Voir « *Les Entretiens du Petit Célinien - Régis Tettamanzi* », propos recueillis par Matthias GADRET, le 23 septembre 2012 (http://www.lepetitcelinien.com/2012/09/les-entretiens-du-petit-celinien-vii.html).

15) Voir Henri GODARD, « *Une publication qui assainirait la situation* », *Le Monde*, 5 janvier 2018, p. 7.